

1 横浜のあゆみ

二〇年前のくらし

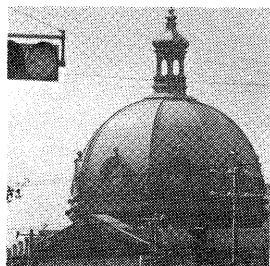
●ふえない商店・工場数

横浜市の工業統計調査によれば、戦前の昭和七年、横浜市の全工場数は四、二四〇、それに対して五二年は七、九八九。同じく商業統計調査による市内小売店の数は、七年二万〇、四九六、五年二万七、一一〇。ともに二倍に達していない。この間に人口は、六六万人から二六二万人へと四

倍になっているから、数の点では、両方とも伸びがすくなくったといえよう。

もちろん工場の場合は、従業員数が三万三、九〇六人から二〇万七、二四四人へと六倍強もふえ、規模別でも五〇人以上の二工場が二九へ、千人以上の三工場が二五へと大規模の工場は十倍以上になっているが、町工場についてみれば、相対的には減っているのである。

小売店も江戸時代にはそう多いものではなかった。江戸時代の商店は、問屋とか卸とか仲買が主流で、仲間をつく



って統制していたので、数は限られていた。それゆえ江戸の町の庶民というのは、小商人でなく、主として職人のことであった。零細な小売店がやたらとふえだすのは、明治以後、農村から都会への人口移動がはじまってからのことである。それにしても、昭和七年の横浜市全世帯数は一四万四千戸だから、実にその七分の一が小売店ということになる。

工場にしても四千余のうち、職工五人以上の工場は四三五しかない。のこりの九割弱は職工五人以下のちっぽけな町工場だった。当時、日本人の大部分は貧しかったし、それにこんな小さな規模では新陳代謝もはげしく、生きるのにつらい時代だったが、一方独立することはそうむづかしいことではなかった。

だから、いまとちがって、昔の旧制工業学校、商業学校は旧制中学よりも難関だった。中学を出ただけではなんの役にも立たないのだから、経済的に豊かでなく、はやく独立したいと願う少年たちは実業学校をめざしたものだ。実業教育は、徒弟奉公、丁稚奉公の伝統をひいていた。奉公稼業では、仕事はきついし、賃金も技術伝習の意味あいがあった、たいへん低かった。しかし、そうしたつらい日

々には、いずれそのうち一本立ちするんだという、はげみといおうか、生きがいがあった。

●賃金はあがったが……

ところが、こうした独立のパターンは、昭和三五年頃をさかいに急激に消えうせた。高度成長は、中小企業の装備近代化をもたらし、もはや独立して町工場をはじめても、価格や製品のできばえで立ちうちできなくなった。小売店も同様、土地価格のいちじるしい値上りが新規参入をむづかしくした。

独立がむづかしくなったため、伝習の意味はなくなった。そこで、従業員の賃金は、世間なみの労働時間にあつた賃金にアップした。三十年代の後半には、いままでする大学生などで占められていたスキーやスケートのレジャーにも大量の勤労青少年が行きだすようになった。一見、繁栄の体である。しかし、生きがいはどこへいったらう。

●もはや戦後ではない

敗戦によって、わが国の政治・経済のしくみは大きくかわった。軍隊がなくなるなど考えられなかったことだ。し

かし、社会のしくみとはちがって、わたしたちの日常生活はゆるやかにしか変らない。

いまから二三年前の昭和三十一年に、『経済白書』は「もはや戦後ではない」と結語した。たしかに、マクロの製造工業生産指数は、二五年に戦前水準（昭和九一一年平均一一〇〇）にもどり、三十一年には二三一と二倍をこえた。国民所得も二七年には九八とほぼ戦前の水準に回復した。

飢えのおそれは遠のいたけれど、エンゲル系数が四割をこえていた当時には、くらしむきはまだまだ昔にもどらないと戦前との比較でグチをいっていた私たちにとって、白書の提言はショックだった。たしかに、まわりをみわたせば、世の中は少しずつ変りはじめていた。今にして思えば、戦後の混乱期よりも高度成長の期間の方が、私たちの日常生活をすっかり変えてしまったといえる。

昭和三十一年の日常生活は、明治以後九〇年の歴史とつながっていたのに、いまは切れてしまっている。たぶん、そのころの話はわかい人びとには昔ばなしととられることだろう。しかし、それは私たちの生活の原点でもあるので、ここではまず二〇年前をふりかえることから筆をすすめたいと思う。

●斜陽からの脱却

昭和三十年代の前半は、横浜の市街地の中心部がさびれきった時期だ。高度成長のはしりの時期、東京へ行くと、都心部は高層ビルの建設や道路の拡張などで日に日に変貌をかさねていて、空がつかえるような異和感をおぼえたものだが、さて横浜へかえると、桜木町の駅から市役所のところまで、ずっと見とおしがきいていて、焼けビルが所々にのこっている風情など、接収による打撃のふかさを思いしらされたものだ。

横浜の市街地中心部・港湾の大半を占めた接収により、県市の税収入は激減し、そのために公共投資ができず、いちじるしく戦災復興に立ちおくれた（道路など戦前のすがたのままだった）のだが、一方庶民の側からみると、戦後の横浜はアブク銭が渦をまいている街なので、活気にみちあふれていた。そのころ、アメリカ兵は一等兵でさえ月十万円ほどの収入があった。日本人大卒者の初任給の一〇倍である。当時、外人向け民間ハウスの家賃が一五坪で二万五千円位の相場だったが、土地さえあれば、建物は二年間で償却できたので、大家にしてみれば、実に割のよい商売だった。日本人の平均給与の五、六倍にもおよぶ金が米兵

に支払われ、それが還流していたのだから、横浜に活気があったのも当然といえよう。

それが朝鮮戦争が終り、日本の独立が回復することで、米軍は横浜からしだいに姿を消していった。三二年には米軍の地上兵力撤退の声明がだされた。米軍の撤退は即関連産業や商人の倒産・転業であり、駐留軍労務者の失業であった。また同じ頃、港でもコンテナの進出は荷揚げ業者とその関係者の失業をもたらした。

では、このように斜陽都市化しつつあった横浜の都市を急膨張させた力はなんであつたらうか。それは、高度成長のもたらした首都圏の拡大にほかならない。三十年代の後半、関西メーカーの関東進出により、戸塚区内の東海道線沿いの低湿地や後背部の丘陵地帯が農地から工場敷地へとかわった。それが一段落すると、こんどは郊外に宅地開発のブームがおきた。

一方、都心部の関内地区も、いたるところ空地だらけで、関内牧場といわれていたのが、高度成長がすすむにつれ次第に新しいビルがたてられ、復興のおくれをとりもどして、ととのった町並みが造られてきた。

●個人のくらしと物価

三十年代の前半は大学卒の初任給一萬円の時代だった（勤労者の平均月収は三万円）。ここで、ひとつの例として、会社社とめ六年になる佐々木五郎君の家計をみてみよう（『文芸春秋』昭和三〇・五）。

妻君との二人暮らしで、年齢は二八歳位になる佐々木君の昭和三〇年三月の月給は二万二、八〇〇円で、そのうち税金・健保などで三、四二四円差引かれ、手取りは一萬九、三七六円だ。表でみるように、退職金へのはね返りをふせ

表1-1 給料の内訳

収入		支出	
基本給	4,800	租税公課	3,424
物価手当	14,000	食費	6,800
勤務地手当	3,200	衣家賃	2,000
家族手当	800	光熱通生	2,500
		交衛交貯	2,400
		他	1,600
			400
			700
			1,400
			1,000
			576
	22,800		22,800

ぐためか、物価手当が基本給の三倍近くもある乱世型だ。支出のうち食費は約三割だから、めぐまれているほうだが、それでも娯楽費七〇〇円では新聞三五〇円のほか、雑誌一冊、映画月一回が限度。

家賃も月二、五〇〇円では、一〇坪前後の公営住宅しか入れない。洋服の仕立代は、大学卒の初任給とほぼ並行している。当時オーダーの背広一着は一万五千円した(既製服は九、六〇〇円)。衣服の月二千円(約一〇%)は)国民平均の一四・六%より低い、これは子供がいなかったためだろう。この程度の衣服費では、背広の新調は二、三年に一度位の勘定になる。それにあれこれ切りつめても貯金は五%しかできない。いまよりはずっと少なかった大学卒の佐々木君でさえ、家計費というフィルターを通すと、この程度の暮らししかできないことがわかる貧しい時代であった。

つぎに、当時の物価をみてみよう。大学卒の初任給はいまの一〇分の一だが、勤労者の全平均では八分の一位の見当になる。いまの物価とくらべて、それほど変わっていないものには、ラーメン三〇円、コーヒー四〇円、封切映画一三〇円、風呂一五円、大根一本一〇円がある。カレーライスは一〇〇円だからたかい。一方安いものは、バス一〇円、理髪一五〇円、畳替一枚一五五円など、総じて公共料金は過去のストックの食いつぶしにより安かった。国鉄運賃も安い、収入の方がともなわず、旅行ブームはまだおきていない。

さて、それではいまよりずっと高かったものというところ、ビール(大一本)一二二円、一級酒一合七〇円、焼酎一合三五円、タバコ(ピース二本)八〇円、卵一コ一〇円、牛乳一合一五円、男物短靴二、五〇〇円などである。し好品は税金の関係(タバコの税率六八・八%)で猛烈に高かった。また、週刊誌が三〇円、『芸芸春秋』が百円していたほか、電化製品もたかい。20Wのアンプ(モノラル)が二万三千円していたから、いまより値段がたかかったし、LPも二、三〇〇円でいまとほぼ変らない値段だった。

昭和三二年に、横浜の市街地で土地五〇坪(一六五²m)、建物一五坪(五〇²m)の木造住宅を手に入れるのには、土地代七八万円、建築費六三万円、合計一四一万円が必要だった。当時と比べて今の物価が八倍として一、二〇〇万円だから、相対的には割安だったが、当時は簡便な借金の手だてが住宅金融公庫以外とぎざされていたことを考えると、決して容易なわざでなかった。

●電化生活がはじまる

高度成長がはじまるまえには、家族のなかでそれぞれの役割分担があった。洗濯、炊事などでいちばん大変なのは

母親だったが、子供にも子供なりの役割がちゃんときまっていた。雨戸のあけたて、庭掃除、靴みがき、風呂の水くみなどがそれだが、東京の区部でも世田ヶ谷などはまだ井戸を使う家が残っており、子供の力では風呂の水をくむのに三〇分もかかった。

それが二十年代の終りになると電動ポンプがはいり、水道なみに蛇口をひねればすむようになった。風呂たきの燃料もマキから石油バーナーやプロパンガスにかわるのが同じ頃である。

三種の神器ということばがあった。はじめは電気洗濯機、電気冷蔵庫、テレビの三つを指していた。それぞれ二万円から八万円ほどして、月収の一〜三か月分にあたり、庶民には高嶺の花だったから、神器とよばれた。ところで、家庭の電化は一万円以下の手頃な商品からはじまった。ハシリはジュースミキサー。ハウザー食とやらで、生野菜をたべることが流行したためだ。

つづいて電気コタツ、それから電気炊飯器。これはタイムスイッチがついたのが主婦にうけたようだ。昭和三〇年の末に東芝が五百台を発売したのははじめだが、最初はふつうの釜の三倍もしたのでなかなか売れなかった。それが

五年後には全国で百万台の万台をこえた。

こうした家庭電化により、七輪、タドン、木炭、お釜、お櫃ひびといったなつかしい品物が家庭からすがたを消した。人々はこれを生活改善とよんだ。

昭和三十一年の横浜市内におけるテレビ普及率は六%である。子供がテレビのある家へ月光仮面などを見に行くことがあっても、それはいつときで、まだ家庭のだんらんは失われなかった。テレビのない時代のふんいきを濃厚につたえるものに「サザエさん」の漫画がある。そしてテレビ時代のいま、作家の長谷川町子さんが新聞の連載を休んでいるのは、こうした世の中の変り方と深い関係があるのでないかと思われる。プロダクションによるテレビ漫画の「サザエさん」は高視聴率の番組で長年つづいているが、あの磯野波平一家にはテレビをみる場面が少ないのに留意すべきであろう。

昭和三十一年は、雑誌社系週刊誌の創刊（『週刊新潮』）、『主婦の友』のサイズ大判化、クイズ・ブームなど大衆社会化現象のハシリがみられた年だった。ドライ、太陽族などのことばが流行し、プレスリーが登場するなど若者の自己主張がめだつ年でもあった。しかし三十一年の戸塚区を例

にとつて普通・小型自家用車の所有台数をみると、一万七、四一三世帯で五八台しかない（三三年八八台、五二年五万一、七九五台）。どうも太陽族というのは、マスコミがさわいだわりには若者のほんの一部の現象であつたらしい。

最後に教育の状況だが、市内幼稚園の就園率は、二八年の一五・四％が三二年の二三・二％と着実にのびつあつた。それでもまだ四分の一である。それが五一年には園児数が八万〇、二六九人で七九・四％に達している（ほかに保育所一万四、九一六人）。横浜市内高校生の大学進学者は三〇年、三一年とも二割である。このように、変貌しつつあつたとはいえ、まだ過去のすがたをひきずつているのが、三十年代はじめの様相であつたといえよう。

横浜のまちづくり

●都市自治は居留地から

横浜の居留地に住民の自治機関が設けられたのは、慶応元年（一八六五）五月のことで、各国の居留民によつて選ばれた二六名からなる市参事会が、以後居留地の行政を運営

することになった。これが、外人によるものではあるが、わが国における近代的な都市自治のはじまりである。

これより先、三年前の文久二年、居留民は借地人会議を招集して、市政委員会という自治機関をつくつたが、まだ臨時組織にとどまつていた。もちろん、居留地の行政については、各国領事団が権限をもつていたので、すんなりと市民による自治組織への権限移譲がみとめられたわけではない。

半年ほどかかつて、数回の話しあいのうちに、やっと領事団は市参事会に権限を委任することをみとめ、両者のあいだに契約書がとりかわされた。この結果、市参事会は、道路・下水道の管理・衛生規則の作成・警察力の組織などを任務として発足した。経費は地代収入の一部の還付をうけてまかなうこととした。この市参事会は、衛生・警察法規を公布して、免許料や罰金を自由に課する権限をもつていたので、いわば小型の市庁 (Municipal Government) といつてよい存在だつた。

居留地の行政が、日本人の町に影響をあたえた例としては、清掃規則の制定がある。横浜では、文久二年七月に清掃規則がつくられているが、これは京都下京区の明治一五